

# 『マクロプロスの術』

## チャペックとヤナーチェクの

— 伝統あるチェコの錬金術文学とそのオペラ —  
石川達夫 (神戸大学教授・エッセイスト) Tatsuho Ishikawa

ハプスブルク家出身のチェコ国王・神聖ローマ皇帝ルドルフ2世(在位1576～1611)をご存知だろうか？ 芸術家や学者のパトロンとして知られ、膨大な芸術作品などを収集し、そのコレクションをプラハ城内の特別な場所に陳列していた(その多くは後に散佚してしまったが、一部は今もプラハ城国立美術館に展示されている)。彼のコレクションの中には、芸術作品だけでなく、自然への関心を示す自然の産物や珍奇物と並んで、錬金術への関心を示す貴石や半貴石も含まれていた。これらの石は、不思議な治癒力を持つと信じられていたものだった。

ルドルフ皇帝はオカルト学の庇護者でもあり(そもそも当時はまだ錬金術と化学、占星術と天文学がはっきりと分離していなかった)、チェコ王国と神聖ローマ帝国の首都として繁栄したルドルフ時代のプラハでは、有名な画家アルチンボルドや天文学者ケプラーだけでなく、有名な錬金術師ディーラも活動していた。ルドルフは錬金術師たちに資金や贈り物を与えた代わりに、期待を裏切られた時には詐欺師として容赦なく罰したという。

錬金術師たちは、不完全なものを完全にする究極の物質である「エリクシル」ないし「賢者の石」を得ようとした。それは金属の粗悪さを治すばかりでなく、人間の病をも治すと考えられていた。だから、「エリクシル」は、卑金属を金に変える錬金薬を意味すると同時に、あらゆる病気を治して不老不死を実現する霊薬をも意味した。そして錬金術師の中には、ルドルフの宮廷侍医を務めた者もいた。

このようにルドルフ時代に頂点に達したプラハとチェコの魔術的伝統のために、チェコは「魔術師の国」(シャトーブリアン)、プラハは「古いヨーロッパの魔術の首都」(ブルトン)と呼ばれるようになり、錬金術にまつわる文学作品が多く書かれて、いわばチェコの「錬金術文学」の伝統ができることになるが、その一つがチェコを代表する作家カレル・チャペックの戯曲『マクロプロスの術』(1922年)である(「術」に当たる単語věcは多義的で、他の意味にも取れる)。

この戯曲の舞台は20世紀前半のチェコ、ヒロインは素晴らしい歌声と蠱惑的な美しさを誇るオペラ歌手エミリア・マルティ。1827年に死んだプルス男爵の遺産相続をめぐる100年近く続いている訴訟を担当している弁護士コレナティの事務所、突然彼女が現れる。この訴訟の最終的な判決が最高裁で間もなく下されることになっているのだが、彼女は判決を決定的に左右するような事実を次々と告げ、しかも100年も前のことを自分が実際に経験したかのように話すのだ。

エミリアはなぜか、遺産の中に含まれている「マクロプロスの術」という謎めいた古文書を、是が非でも手に入れようとする。後に彼女の正体が明らかになるが、本名をエリナ・マクロプロスというギリシャ生まれの女性で、生年はなんと1585年、当年にとって37歳。ルドルフ2世の侍医だった父ヒエロニムス・マクロプロスが発明した「マクロプロスの術」によって、300年間老いずに生きていたのだ。

ルドルフ皇帝は、自分が老いてきた時に若さを取り戻したいと思い、命のエリクシル(不老不死の霊薬)を探し求めた。そこにエミリアの父がやって来て、「マクロプロスの術」を書き記したのだった。けれどもルドルフは中毒することを恐れて、マクロプロスにその術を最初に自分の娘で試すように命じた。そこで当時16歳だったエミリアが実験台になった。彼女は発熱して意識を失ったまま1週間ほど横たわっていたが、その後回復した。しかしルドルフは怒った。というのも、彼女が本当に300年生きるかどうかを確かめることなどでできず、エミリアが倒れたのを見たルドルフは、ヒエロニムス・マクロプロスを詐欺師と見なしたからだ。ルドルフは彼を投獄し、彼女は父が書いたものを持って逃げ出した。

その後エミリアは、イニシャルだけ同じの様々な偽名で色々な国を渡り歩いてきたが、19世紀になってから愛したプルス男爵に、「マクロプロスの術」という古文書を貸した。彼はその秘術を自分に試したところ、高熱と痙攣のうちに死んでしまった。そして死ぬ前に、その古文書を、彼女との間にできた息子に委ねると遺言した。彼女は、既に300年以上生きて、自分が老いてきて死が近いことを感じたので、再び秘術を試してみようとして、その古文書を取り戻しに来たのだった。

エミリアは死を恐れてはいるが、人生にも歴史にも幻滅し、この世のすべてに飽きて、魂は死んでいる。今までに何人もの男たちが彼女の謎めいた魅力の虜になり、彼女

を狂おしく愛して、彼女を殺そうとしたり自ら命を絶ったりした。心の冷え切った彼女は、男たちを不幸にするほかないのだ。そしてついに彼女は、「マクロプロスの術」をも欲せず、その古文書は燃やされてしまう……。

このチャペックの戯曲は、その上演を見て感銘を受けたヤナーチェクによって、1925年にオペラ化された。ヤナーチェクの台本は、チャペックの原作のうち第3幕で長寿の是非を議論する部分を丸ごとカットし、その他多少の変更を加えているが、それ以外は原作のテキストをほぼそのまま用いている。しかし両者の根本的な相違は、チャペックがこの戯曲を喜劇として書いたのに対して、ヤナーチェクはそれを悲劇にしたことである。

ヤナーチェクは、チャペックの戯曲の上演を見た後、37歳も年下の恋人カミラ・シュテースロヴァーに宛ててこう書いている。「37歳という年なのに、まだ若くて美しい女性。あなたもそんなふうになりたいですか？ でもねえ、彼女は不幸だったのです！ 私たちは、人生が長くないことを知っているから幸福なのです。だから一瞬一瞬を無駄にせず、適切に使う必要があるのです」。

哲学的思考の持主で、この戯曲を書いた時にはまだ32歳だったチャペックが、長寿の問題を抽象的・哲学的に捉えたのに対して、このオペラを書いた時には既に71歳という高齢で(3年後に彼は死ぬ)、「老いるの恋」にはあまりにも情熱的な恋をしていたヤナーチェクは、不可避の死を前にした人間にとっての生の一瞬一瞬の貴重さと、逆に不老長寿がもたらす生への倦怠と魂の冷却という具体的な人間の悲劇に関心を集中したと言える。彼は恋人のカミラに、エミリアとは反対の女性を望んだのかもしれない。

『マクロプロスの術』の込み入った設定と推理小説的な展開をオペラの歌詞で捉えるのは簡単ではないが、老いてもなお情熱的だったヤナーチェクの音楽は力強く美しい。